



主イエス・キリストの復活を心よりお祝いいたします。今年は新型コロナウイルス感染症の伝染を避けるために、「緊急事態宣言」を出した政府、行政から「集まらないように」との要請がありました。

教会も命を守るために、除菌、殺菌、換気など衛生面に配慮し、高齢者や体の弱い人、バス、電車を利用してくる人は自宅で礼拝をするように勧め、心を砕いています。私は病後の夫の健康を守るためにも、自宅で二人で静かにイースターをお祝いしています。お祝いといっても祈ることしかできません。皆様と共に礼拝し、讃美歌を歌うことが、どんなに心躍る嬉しいことだったか、と今更ながら感じてしまいます。

寂しい思いの老親を慰めるためにお嫁ちゃんがバルコニーで育てているお花をブーケにして届けてくれました。また友人が可愛いバニーちゃんのカードを送ってくれました。

復活祭は特定の日が制定されていません。「春分を過ぎた満月のあとの最初の日曜日」という決まりになっていますので、毎年変わります。今年は先週見事なスーパー・ムーンを見たあとの日曜日、12日が復活祭、英語ではイースター(Easter)と言っています。クリスマス(Christmas)は祝祭の意味が分かりますが、イースターという言葉は分かりにくいです。

初代教会も復活祭のお祝いを守ったことでしょう。イエス様がユダヤ教の伝統の祭りである過越祭の席を用意され、弟子たちと共に「最後の晩餐」を持たれたので、初代教会のクリスチャンは、それに倣い、主イエスの復活を過越祭の期間に祝ったと思われます。ギリシャ語では過越祭も復活祭も同じ言葉で Páscha ということです。

時が流れ、世界にキリスト教が広がり、イギリスの7世紀ごろのベネディクト派の僧ビードが Paschal month(過越祭・復活祭の月)を、Month of Ēostre(原語では *Ēosturmōnaþ*)と翻訳し、復活祭を祝ったと言われています。4月に当地イギリスでは春の女神エオストレ(Ēostre)を祝っていたため、それに因んでその言葉を用いたからだと言われています。ですから、イースターという言葉は、ゲルマン民族の光と春の女神エオストレ(Ēostre)が原義ということになります。イースターはとても変なネーミングということになりますね。翻訳はなかなか難しい面があります。正式に「復活祭」という言葉はあっても、ニックネームのほうが定着してしまったのでしょうか。それに伴い、復活祭にエオストレ祭りの様々な要素も取り入れられ、伝統になり、慣れ親しんできたのでしょうか。

復活祭は「イエス様が生きて働いておられる」ことを祝う時です。それを実感するのは、礼拝で聖書の御言葉を聞くと、祈りを合わせる時、心にひびくものを感じる時です。また、社会の中に、愛や正義を見出す時です。エマオの途上で弟子たちが道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか(ルカ24:32)といった通りの体験を私もします。父は、キリスト教に始めて触れて以来、恩師の祈りの声や、時折、恐れと共に感じさせられる、耳に付いて離れない言葉に、突き動かされ、導いて頂いた、声が聞こえたとよく申していました。母は胸に大きな外科的治療を受ける時、不安な思いで必死に祈ったと言います。施術の時、「イエス様が傷口に手を置いて下さった、あたたかい手だった、痛みもなかった、感謝で一杯」と話してくれたことがあります。私は11歳の時、危篤の夜を迎えました。私が時折遊んでいた土手の川原のような草原にイエス様が立っておられ、私を振り向かれた後に、先に進んで行かれた夢を見ました。忘れることができません。必死に生きようとする時、「生きて働かれるイエス様」に出会えると私は信じています。